

○ 青園家・結乃の部屋（夜）

時計が2時を指している。

暗い部屋にテレビ画面だけが光っている。

青園結乃（14）がテレビの前に座って画面を見ている。

テレビ画面には扉の両側に立つ学ラン姿のカエデ（18）とセーラー服姿のサクラ（18）。

カエデ「準備はいいか？」

サクラ「あなたの未来に願いを込めて」

カエデとサクラが扉を開き、光が差し込む。

○ 同・キッチン（朝）

青園優子（41）が料理をしている。

2つのトレイにそれぞれ同じ料理。

2つのお弁当箱に同じご飯とおかずを詰め込んでいく。

○ 同 ・ 結乃の部屋（朝）

カーテンは閉じたままで薄暗い。

結乃、ベッドで眠っている。

部屋の壁にはハンガーにかけられたセ

ーラー服や学生鞆が埃をかぶっている。

部屋のいたるところにカエデやサクラ

のポスターやフィギュア、劇中に出て

くる扉のレプリカなどが飾られている。

部屋のドアは閉まっているが鍵は付い

ていない。

ドアの下部分には小さな扉の付いた穴

が開いている。

○ 同 ・ ダイニング（朝）

優子がメッセージカードを書いている。

ラップがかけられたトレイが1つ。

○ 同 ・ 結乃の部屋の前（朝）

優子、ドアの前に無言で立っている。

ラク（4）が来てドア下の扉から中へ

入っていく。

○弁当屋・店内

優子とスタッフ①、スタッフ②が弁当を作っている。

スタッフ①「あんたそのネックレスどうしたのよ」

スタッフ②「あ、これ？昨日結婚記念日でさ」

スタッフ①「あら、ラブラブね」

スタッフ②「まあねー。あ、ごめんなさい」

優子「全然」

スタッフ①「そういえばうちの娘がこの前彼

氏とデートしてるの見ちゃってさ」

スタッフ②「中学生だったっけ？」

スタッフ①「来年受験なのに遊んでばかり

で困っちゃうわよ：：あ、ごめん」

優子「気にしないで」

スタッフ①「青園さんは、えっと」

優子「離婚して1年になるかな」

スタッフ②「もうそんなに経つんだ」

優子「20年連れ添って鳥に負けるなんて、
あつけないもんよ」

スタッフ①「あんだだっで旦那より猫をとつ
たんだからお互い様でしょ」

スタッフ②「娘さんは……」

優子「そっちもそろそろ1年かな。引きこも
って。部屋でアニメとかゲームばかり」

スタッフ②「へ、へえ……アニメねえ」

スタッフ①「私もたまにゲームとか……」

優子「しないでしょ」

スタッフ①「ハハハハ」

スタッフ②「ごめんね気を使えなくて」

優子「そこが2人のいいところ。こっちも変
に気を使われるより楽でいいわ」

スタッフ①「でしょー」

客が入って来て。

スタッフ①、②「いらっしやいませ」

○同・休憩室

優子、作って来た弁当を食べている。

店長が来て。

店長「遠慮しないで好きな食べちゃっていいからね。みんなそうしてるし」

優子「ありがとうございます」

店長「どうなの最近、結乃ちゃんは」

優子「相変わらずですよ。来年は受験だっていうのにどうしたらいいか」

店長「……でも、優子ちゃんの気持ちは伝わってると思うよ。そうやって毎日手作りのご飯用意して、別々の場所でも同じものを食べて。そういうのちゃんと伝わるから」

優子「ありがとうございます」

○青園家・結乃の部屋（夕方）

空のベッド。

部屋には誰もいない。

○同・キッチン（夕方）

お弁当箱が綺麗に洗われている。

○ 同 ・ 洗面所（夕方）

お風呂場からシャワーの音。

バスマットにラクが座っている。

○ 同 ・ キッチン（夕方）

頭にタオルを巻いた結乃がラクを抱いている。

インターホンが鳴る。

結乃、楽を足元に下ろし冷蔵庫から水を取り出して飲む。

○ 同 ・ ダイニング（夕方）

電話が鳴る。

結乃、トレイの料理を少し手に取りラ
クに与える。

電話がまだ鳴っている。

結乃、トレイを持ってダイニングを出
ていく。

ラク、ソファで寝ている。

○同・結乃の部屋（夜）

スマホでゲームをしている結乃。

○結乃のゲームの世界

ゲームは、オシャレな街で自分のアバターがカフェやショップを巡る設定。
結乃のアバターの名前はペンギン。
ペンギンがカフェに入ると、フクロウ
という名の女の子のアバターがいる。

ペンギン「こんにちは」

フクロウ「こんにちは」

ペンギン「今日は何してたの？」

フクロウ「空を見てた」

ペンギン「どうだった？」

フクロウ「寒くて、透き通ってた」

ペンギン「寒いんだ」

フクロウ「明日は雪かも」

ペンギン「寒いと部屋から出れないね」

フクロウ「そうだね」

ペンギン「風邪引かないように」

フクロウ「あなたも」

○ 同・結乃の部屋（夜）

テレビアニメを見ている結乃。

カエデとサクラが依頼者の悩みを聞いているシーン。

カエデ「つまり、いじめられている友達を助けようとして自分がいじめられるようになっていった」

サクラ「で、あなたは何を願うの？」

カエデ「友達を助けたのか、自分を助けたのか」

サクラ「いじめてる奴らに復讐とか」

カエデ「君の願いはこのドアが聞いてくれる」

サクラ「ドアの向こうに何かあるかは、開いてみてからのお楽しみ」

カエデ「準備はいいか？」

サクラ「あなたの未来に願いを込めて」

カエデとサクラが扉に手をかける。

結乃、テレビを消してベッドに潜り込

む。

（回想）

○学校・教室

渡辺友恵（14）が席で漫画を読んでにやけている。

立花真琴（14）がクラスメイトたちと目配せをして友恵の漫画を取り上げる。

真琴「なんか臭いと思ったらこれか」

真琴、漫画を床に投げる。

クラスメイト①がそれをゴミ箱に捨てる。

友恵「うひょーマジか」

友恵、ゴミ箱から漫画を拾う。

真琴「ちよつと頭おかしいんじゃない！？」

クラスメイト②、友恵の机を蹴る。

友恵の荷物が床に散乱する。

結乃駆け寄って。

結乃「どうしたのみんな、大丈夫？」

真琴「教室にゴミがいて臭いのよ」

結乃「えーそれはヤバイ。そういえばなんか

臭うかも」

真琴「でしょ。友恵が……」

結乃「そうだ！気晴らしに屋上行かない？私

今日クッキー焼いてきたんだ。真琴の好き

なチョコ味」

真琴「マジで？結乃ってほんと女子だよな」

真琴とクラスメイトたち教室を出る。

結乃、友恵の荷物をさっと拾い上げて

クッキーを1枚置いていく。

友恵「……かたじけない」

○同・屋上

結乃、真琴、クラスメイト2人がクッ

キーを食べている。

クラスメイト①「ちよつと硬くない？」

クラスメイト②「喉乾くね」

真琴「てか友恵マジでウザいんだけど」

クラスメイト①「ほんとそれ」

クラスメイト②「オタクすぎて喋り方とか怖くない？」

結乃、友恵の真似をして。

結乃「うひょー」

クラスメイトたち笑い転げる。

結乃「でも一周回って面白くない？今度ここ誘ってみようよ、話してみたら意外と楽し

いかもだし」

真琴「あんた何言ってるの？」

（回想終わり）

○青園家・結乃の部屋（夜）

スマホにラインが届く。

葛城雅也（42）から青空の写真とメ

ッセージ。

葛城「メッセージ」今日はめちゃくちゃ寒くて仕事サボってユウコと公園デートしてやったぜ」

葛城とセキセイインコの2ショット写

真。

結乃「……クズ親父」

（回想）

○学校・教室

友恵が席で漫画を読んでにやけている。

結乃が向かい側の席に座って。

結乃「そんなに面白いの？それ」

友恵「え、あ、そ、そだね」

結乃「そだねだって、うひょー」

友恵「……」

結乃「え、何、使い方間違ってる？」

教室の後ろでクラスメイトを引き連れ

た真琴、結乃の鞆を片手に。

真琴「結乃」

結乃、立ち上がって固まる。

真琴「今日はこっちが臭うかも」

真琴、結乃の鞆から弁当袋を取り出す。

クラスメイト①、それをつまんでクラ

スメイト②に渡す。クラスメイト②が

それをつまんでゴミ箱に捨てる。

（回想終わり）

○青園家・結乃の部屋（夕方）

頭にタオルを巻いた結乃、料理の乗ったトレイ、お菓子、ペットボトルを持って入ってくる。
ベッドにカエデが座っているが結乃は持っている荷物に集中していて気づかない。

結乃、荷物を置いてテレビをつける。

カエデ「今日は気合が入ってるね」

結乃「スペシャルだもん万全の体制で挑まな

きゃね」

カエデ「それは嬉しいな。でも前はなんで途

中で消したの？」

結乃「それは……ていうか誰よ！？」

カエデ「カエデだよ」

結乃「不法侵入者！？」

カエデ「だからカエデだって」

結乃「っ、っ、っ！」

カエデ「通報はしなくて大丈夫。本物だから」

結乃「嘘！カエデはもつと」

カエデ「もつと？」

結乃、親指と人差し指で計るように。

結乃「これくらいのはず」

カエデ「それは画面の中でしょ」

結乃「しょ、しょ、証拠は！？」

カエデ、立ち上がり改まって。

カエデ「結乃。準備はいいか？」

結乃「何の準備よ！？」

カエデ「僕の決め台詞じゃん！忘れたの？」

結乃「……ああ」

カエデ「それで？なんで途中で消したの？い

つも最後まで見てくれてるのに」

結乃「……」

カエデ「せっかく扉を開けて来たんだ。教え

てよ、結乃の世界のこと」

結乃「私の世界？……今の私の世界はこの部

屋。この部屋が私の世界の全部」

カエデ「狭いと思ってるの？」

結乃「狭くても、怖くないから」

カエデ「結乃の世界は平和で安全で、優しい

世界だ」

ドアの下扉からラクが入って来る。

カエデ「！！！」

カエデ、ベッドに飛び上がる。

カエデ「結乃！扉を開けて！」

結乃「へ？」

カエデ「早く！その扉を開けて！」

結乃、レプリカの扉を開く。

光が差し込み、カエデが消える。

ラク、トレイの料理をカサカサ。

結乃「え？何？夢？」

テレビでアニメが始まる。

○同・ダイニング（朝）

優子、メッセージカードを書いている。

外は雨。

○街（朝）

車から空を見上げる葛城。

葛城の肩にはセキセイインコのユウコ。

○学校・教室

真琴が席に座っている。

クラスメイト①と②が来て、真琴の頭の上からゴミをかける。

真琴「ちよつと何するのよ！」

クラスメイト①「真琴って小学生の時いじめられてたんだって？」

クラスメイト①、スマホで動画を見せる。

小学生の真琴が教室でみんなからゴミを投げられている姿がSNSに投稿されている。

クラスメイト②「今まであんたのご機嫌取つてた私たちの身にもなつてよ」

クラスメイト①「好きなんでしょ？ゴミ」

真琴、教室を飛び出す。

友恵、自分の席で漫画を読みながらに

やけている。真顔になり小声で。

友恵「うひょー」

○青園家・結乃の部屋（夜）

結乃のご飯を結乃、カエデ、サクラが
食べている。

結乃「……なんでよ」

カエデ「足りないね」

サクラ「結乃、おかわり」

結乃「何なのよこの状況！カオスか！」

カエデ「悪くないね」

サクラ「結乃！おかわり！」

○同・キッチン（夜）

結乃、イライラしながら料理している。

スマホが鳴る。

葛城から雪空の写真とメッセージ。

葛城「（メッセージ）今日は雪が降って仕事が

休みだったぜ」

葛城とセキセイインコと雪だるまの 3

ショット写真。

結乃、微笑む。

○同・結乃の部屋（夜）

カレーライスが盛られた皿が3つ。

ご飯が雪だるまやスヌーピーに形どら

れ、海苔で顔などデコられている。

サクラ「すごいじゃん結乃！ヤバ超かわいい」

カエデ「結乃にこんな才能があつたとはな」

結乃「まあね。てかなんで私があんたたちの

ご飯作ってるのよ。引きこもってるんです

けど、私。かれこれ1年引きこもりの不登

校なんですけど」

カエデとサクラ、食べながら。

サクラ「これ写真撮ってインスタ載せようよ」

カエデ「そうだねインスタ映えだね」

サクラ「結乃これ他にもできる？オムライス

とか」

結乃「できるけど。食材があれば」

サクラ「買って来たらしいじゃん」

結乃「だから私今引きこもってて」

カエデ「お金ないの？」

結乃「お金はあるよ、お小遣いも貯まる一方だし」

サクラ「じゃあさじゃあさ、お菓子も作れたりする？デコスイーツ」

結乃「昔ママとよく作ってたからできるけど食材がね」

サクラ「やった！私ドーナツがいい！」

カエデ「もうすぐクリスマスだからケーキもいいね」

サクラ「ヤバイ超楽しみ！」

結乃、つぶやくように。

結乃「……うひょー」

○同・結乃の部屋（深夜）

時計は3時を指している。

ベッドにはラク。

結乃、スマホでゲームをしている。

○ 結乃のゲームの世界

ペンギンが公園に行くと、フクロウが
いる。

ペンギン「こんばんは」

フクロウ「こんばんは」

ペンギン「フクロウさんは友達がいますか？」

フクロウ「いますよ」

ペンギン「疲れたりしないですか？」

フクロウ「なんで？」

ペンギン「気を使ったり、振舞わされたり」

フクロウ「それはうわべの付き合いだからだ

と思います。心が通じていると、本当に必

要な時に傍にいてくれます」

ペンギン「なんだか深いですね」

フクロウ「あなたは友達は？」

ペンギン「わかりません」

フクロウ「もし何かあれば、私が駆けつけま

す」

ペンギン「フクロウさんが？」

フクロウ「はい。ペンギンさんは私の友達な

ので」

ペンギン「ありがとうございます」

フクロウ「相手がどう思っている、自分に

とって必要な存在なら、友達と言ってもい

いと思います」

ペンギン「そうですね。ありがとう」

結乃、無言でラクを撫でる。

○弁当屋・休憩室

優子と店長。

店長「何？相談って」

優子「食事と一緒にメッセージを付けてるん

ですけど、これまで返事なんて一度もなか

ったんですよ。それが急にほしいものが書

かれるようになって」

店長「ほしいもの？漫画とかゲームとか？」

優子「それが野菜とか肉とか」

店長「え、なんで？優子ちゃんご飯作ってな

いの？」

優子「作ってますよ。だから悩んでるんです。

しかもそれだけじゃなくて」

店長「何？」

優子「どうやら夜中に散歩してるみたいで」

店長「徘徊！？」

優子「そんな：：どうしよう」

店長「落ち着いて。落ち着いて考えよう」

優子「はい」

店長「まず、優子ちゃんはどうなメッセージを書いてたの？」

優子「えっと、色々ですけど例えば公園の桜が咲いたよとか今日は暑いから冷やし中華ねとか、今度焼き芋買ってくるよ、クリスマスケーキはどんなのがいい？昨日仕事でこんな面白いことがあったよ、明日は寒くなるみたいだから暖かくしてね、新しいシヤンプーの使い心地はどう？カレー辛くなかった？：：」

優子の頬を涙が流れる。

店長「：：頑張り屋さんだね優子ちゃん」

優子「ずっと一方通行でしたけど。だから結

乃の字を見つけた時は嬉しくて。ただ“卵
買っておいでくれる？”っていう一言が本
当に嬉しくて」

店長「うん」

優子「それから、大根と豚肉とか、ホットケ
ーキミックスとか」

店長「う、うん」

優子「私の料理だけじゃ足りないのかな？と
思ってたら、朝起きたら玄関に靴があった
り」

店長「靴？」

優子「はい、結乃の靴」

店長「普段は置いてないの？結乃ちゃんの靴」
優子「はいだって引きこもりですから」

店長「ああそうか」

優子「とにかく最近の様子がおかしくて」

店長「よく食べるようになって外で運動する
ようになったんなら、良いことなんじゃない
い？」

優子「そうでしょうか」

店長「ていうか結乃ちゃんお料理するの？」

優子「あ、それはできます。昔から好きみたいでよく教えながら一緒に作ってましたから」

店長「すごいわねえ若いのに」

優子「なんだか嬉しいです久々に娘が褒められて」

店長「誰だって魅力はあるからね。母親譲りのお料理の才能なんて素敵じゃない。もう少し様子を見てみたら？結乃ちゃんに何か考えがあるかも知れないし」

優子「そうですね。見守りたいと思います」

店長「大丈夫よ。優子ちゃんの娘だもん」

優子「ありがとうございます」

○青園家・結乃の部屋（深夜）

結乃、カエデ、サクラが皿を囲んでいる。

さらにはパンケーキにホイップクリームが添えられている。

サクラ、難しい顔をして。

サクラ「何かが足りない」

カエデ「何？美味しそうだよ」

結乃「そうだよ完璧！写真撮ろう！」

サクラ「わかったチョコだよチョコ！色んな

色のチョコソースがかかった方が絶対か

わいい！」

カエデ「なるほど確かに」

結乃「いいよそんなのなくて」

サクラ「結乃、チョコソース持ってきて」

結乃「ないよ」

サクラ「じゃあ買ってきて」

結乃「また！？もうこれでいいじゃん」

サクラ「ダメこれじゃ可愛くない映えない早

く買ってきて」

カエデ「結乃、ファイト」

○コンビニ（深夜）

パーカーのフードを深くかぶった怪し
げな結乃が入ってくる。

素早くチョコソースを手に取りレジへ。
不意にレジ横のアメリカンドッグに目
がいき。

結乃「アメリカンドッグひとつ」

○道（深夜）

大きなコンビニ袋を手提げアメリカ
ンドッグをかじりながら歩く結乃。

見上げると星空に月。

結乃、スマホで夜空を撮る。

○青園家・結乃の部屋（深夜）

カラフルなチョコソースがかかったパ
ンケーキを満足げに見ているサクラ。
パンケーキの写真インスタに載せる

結乃。

コンビニ袋からお菓子、雑誌、コス
メなど出すカエデ。

カエデ「なんでこんなに買ってきたの？」

結乃「久しぶりに外に出るようになったし、

なんかテンションが上がっちゃって」

サクラ、コスメを手に取り。

サクラ「これめっちゃかわいいじゃん、試し

ていい？」

結乃「いいよ。その色サクラに似合うと思つて買ったし」

サクラ「マジで！？ありがとう」

結乃「こちらこそありがとうね」

サクラ「何？」

ラクが扉から入ってくる。

結乃、慌ててレプリカの扉を持つ。

結乃「じゃあまた明日！」

カエデ「元気で！」

サクラ「笑顔でね！」

結乃、一瞬戸惑うがレプリカの扉を開く。

光が差し込み、カエデとサクラが消える。

ラク、結乃に擦り寄る。

スマホの画面にはインスタに載せられ

たパンケーキの写真。いいねがどんどん増える。

○街・葛城の車

葛城、カップ麺を食べている。

スマホが鳴る。

結乃から星空の写真。

葛城「お、綺麗だな」

再びスマホが鳴る。

結乃からのメッセージ。

結乃「メッセージ」コンビニ帰りに。月がキ

レイだったよ」

葛城、口から麺を垂らしたまま。

葛城「メッセージ」キレイだな！」

葛城「メッセージ」月もいいな！」

葛城「メッセージ」撮るの上手いな！」

葛城「メッセージ」あまり遅いと危ないよ女

の子なんだから！」

葛城「メッセージ」呼んでくれたらいつでも

付き合うからな！何時でも！」

結乃「メッセーじ」うん」

葛城、スマホを見ながら口から麺を垂らし鼻水も垂らし涙も流している。

葛城「おお：おおー！！！」

○青園家・ダイニング

頭にタオルスタイルの結乃。

パンケーキに「いつもありがとう」とメッセーじカードをつける。

○同・洗面所

結乃、制服を洗濯カゴに入れる。

× × ×

○弁当屋・休憩室

優子と店長、泣きながら抱き合っている。

× × ×

○ 青園家・結乃の部屋（夜）

結乃が1人。

レプリカの扉を見つめ。

結乃「なんでよ……」

○ 同・結乃の部屋（朝）

壁にかけられた制服。

結乃は布団に潜っている。

○ 同・結乃の部屋の前（朝）

優子、ドアの前に立っている。

ラク（4）が来てドア下の扉から中へ入っていく。

優子「……」

○ 同・ダイニング（夜）

優子がテーブルを見つめる。

テーブルの上にはラップ掛けされた料理と、包まれたお弁当。

優子の書いたメッセージカード。

「今日は特に寒いから暖かくね！」という優子の文字の下に小さく、「ごめんなさい」という結乃の文字。

優子「結乃……」

○葛城の車（夜）

スマホを見ていた葛城。

肩に乗ったユウコに。

葛城「フラれちゃったぜ。また今度だな」

葛城、窓から青園家を見上げ、車にエンジンをかけて走り去る。

○青園家・結乃の部屋（深夜）

結乃、スマホでゲームをしている。

○結乃のゲームの世界

ペンギンが公園にいと、フクロウが来て。

フクロウ「こんばんは」

ペンギン「フクロウさん。あなたは誰？」

フクロウ「何かあったのですか？」

ペンギン「友達だと思っていた人がいなくな

りました」

フクロウ「そうですか」

ペンギン「フクロウさんは将来の夢ってあり

ますか？」

フクロウ「夢ですか……」

ペンギン「私は料理をする仕事」

フクロウ「料理好きなんですか」

ペンギン「はい。母が作るお弁当が本当に美

味しくて愛情が詰まっています。私もそんな

料理を作る大人になりたいです」

フクロウ「私は」

フクロウ「私は」

ペンギン「はい」

フクロウ「ごめんなさい」

ペンギン「？」

フクロウ「ごめんなさいがちゃんと見える大

人になりたいです」

フクロウ、公園を出て行く。

○青園家・ダイニング（夕方）

頭にタオルスタイルの結乃。

テーブルの上にオムライス。

ケチャップで大きく「愛してる！」

結乃「きも。昭和の恋人か」

結乃、席についてオムライスを頬張る。

ラク、結乃の膝に乗る。

結乃「うま」

家の電話が鳴る。

結乃、気にせずオムライスを食べ続ける。

留守電の音声の後に看護師の声。

看護師「もしもしこちら○○病院です。先程

青園優子さんが交通事故に遭われました：

：

結乃、スプーンを床に落とし電話に飛

びつき受話器をとる。

結乃「もしもし！ママは！？ママは大丈夫で

すか！？」

○病院・待合室（夕方）

スウェット姿の結乃がスマホを持ってうなだれている。

○同・駐車場（夕方）

葛城の車が滑り込み、車から葛城が飛び出して走り出す。

○病院・待合室（夕方）

真琴が息を切らして走って来て。

真琴「結乃！」

結乃、顔を上げて。

結乃「……真琴？なんで？」

真琴「駆けつけるって言ったでしょ！」

× × ×

フクロウ「もし何かあれば、私が駆けつけま

す」

ペンギン「フクロウさんが？」

フクロウ「はい。ペンギンさんは私の友達なので」

× × ×

ペンギン「どうしようママが事故に遭った」

フクロウ「落ち着いて。今お母様は？」

ペンギン「〇〇病院から電話があって」

フクロウ「大丈夫。大丈夫だよ落ち着いて」

× × ×

結乃「……フクロウさん？」

真琴、頷いて結乃を抱きしめる。

真琴「大丈夫だよ……ごめんね」

結乃、泣きながら。

結乃「フクロウさんが本当に来てくれた」

葛城が走って来て。

葛城「結乃！」

結乃「パパ！」

葛城「ママは！？」

病室のドアが開き、足首と腕に包帯を
巻いた優子が出てくる。

結乃、葛城「ママ！」

優子「擦り傷と捻挫だつて。アハハ」

葛城、その場に崩れて。

葛城「なんだ、良かった」

結乃、優子に抱きつく。

優子「結乃：：ごめんね心配させて。びっく
りしたよね。1人で来てくれたの？」

結乃「うん。看護師さんに電話で場所聞いて、
タクシー呼んで、10分で来たんだよ。マ
マずっと出てこなくて、死んじゃったらど
うしようって心配で心配で」

優子「結乃を残して死なないわよ」

結乃「うん」

優子、真琴に気づいて。

優子「結乃、そちらは？」

結乃、涙を拭って。

結乃「私の親友。心配して駆けつけてくれたの」

真琴「こんにちは」

優子「そうなの！わざわざありがとう！」

葛城、真琴の手を強引に握り。

葛城「ありがとう！ありがとう！」

真琴「い、いえ。い、痛い」

○葛城の車（夕方）

葛城の車に葛城、結乃と優子も乗っている。後部座席にはユウコ。

優子「なんだか久しぶりね、みんなが揃ったの」

葛城「そうだな」

結乃「ユウコ元気だった？」

葛城「ラクも元気？」

結乃「うん」

優子「ごめんね本当に心配かけちゃって」

葛城「でも良かった軽い怪我で。こうやって

会えたし」

結乃「うん。でも気をつけてね」

優子「はい、気をつけます。お店にも心配かけちゃったなあ」

結乃「電話しておいたよ店長さんに」

優子「結乃が？ありがとう！店長何か言ってた？」

結乃「ゆっくり休んでって。あと料理がんばってねって、私に」

優子「そう」

葛城「何？店長に話したの？」

優子「ん？うん。結乃が料理できるって言うたら驚いて褒めてくれたの。嬉しくて自慢しちゃった」

結乃「今日は私が夕飯作ってあげる」

優子「本当！？何作ってくれるの？」

結乃「デコカレーライス」

優子「デコ？」

結乃「カレーライス」

葛城「俺も食っていい！？」

結乃「いいよ」

葛城「よっしゃ！」

優子「仕様がな。心配かけたし送ってくれ

たおれだね」

葛城「お前が作るんじゃないんだから」

優子「わかってるわよ。あ、でもユウコはダ

メヨラクがいるから」

葛城「すまんユウコ！お前は留守番だ」

○青園家・結乃の部屋（深夜）

頭にタオルスタイルの結乃がスマホを
見ている。

○結乃のゲームの世界

ペンギンがカフェにいます、フクロウ
が来て。

フクロウ「こんばんは」

ペンギン「起きてたの？」

フクロウ「うん。大丈夫？お母さん」

ペンギン「うん。ありがとね」

フクロウ「うん」

派手なクジャクのアバターが近づいてくる。

クジャク「こんばんは」

ペンギン「こんばんは」

フクロウ「待ってたよ」

ペンギン「フクロウさんの知り合い？」

クジャク「わたくしはクジャクでございます

る。よろしくお願い申し上げます」

フクロウ「ペンギンさん、誰だかわかる？」

ペンギン「友恵じゃん！」

クジャク「会いたかったよー」

ペンギン「うん、ごめんね」

クジャク「とんでもない」

フクロウ「私は明日、ちゃんと謝る」

クジャク「私も」

ペンギン「私も、明日」

○青園家・ダイニング（朝）

制服姿の結乃。

優子が朝食をテーブルに置いて座る。

結乃「いただきます」

優子「いただきます」

結乃、オムレツを頬張って。

結乃「うま！出来立てってこんなに美味しかったんだ」

優子、涙ぐんで。

優子「良かった。本当に良かった」

結乃「ちよつと朝から泣かないですよ」

優子「朝だから泣けてくるのよ」

結乃「そうだね。ごめんね」

優子「謝るのはママの方よ。結乃が苦しんでいても何もしてあげられなかった。助けてあげられなかった。母親なのに」

結乃「助けてくれてたよ。毎朝ドアの前に来てくれて、毎日一緒のお昼ごはん食べてくれて、毎日毎日、ずっと守ってくれてたよ」

優子「結乃……」

結乃「これからもうなるかわからないし、また心配かけてしまったたり、そうやってま

たママをなかせてしまうかもしれない」

優子「いいのよいくらでも心配させて」

結乃「でも、私には大好きな家族がいて親友がいて、夢も見つかったから」

優子「夢？」

結乃「これ」

結乃、スマホでインスタのページを見せる。

優子「なあにこれ！すごいじゃない！」

結乃「ママに教えてもらった料理とかお菓子作り、もっと本格的に勉強してみたいの」

優子「いいわね！」

結乃「でしょ？友達が背中を押してくれたの」

優子「真琴ちゃん？」

結乃「ううん。真琴だけじゃない」

優子「結乃、ママは何があってもママだから。

味方だし、いつも近くで応援したり心配したりするのが幸せなの。結乃のペースでいいんだからね」

結乃「ありがとうママ」

優子「さあ食べよう！」

結乃「うん！」

○同・玄関（朝）

結乃、鞆を持って靴を履き。

結乃「行って来まーす」

優子「待って待って！」

優子、お弁当の袋を持ってくる。

優子「はい！」

結乃「ありがと！行ってきます」

優子「行ってらっしゃい」

結乃、ドアを勢い良く開いていく。

○公園（朝）

真琴と友恵が話している。

結乃が走ってくる。

結乃「ごめん待った？」

真琴「ううん。おはよう」

友恵「おはよう」

結乃「おはよう」

友恵 「久しぶりだね」

結乃 「うん。行こっか」

真琴 「待って」

真琴、改まって結乃の前に立ち。

真琴 「ごめんなさい」

90度お辞儀をして動かない真琴。

真琴をじっと見つめる結乃。

結乃 「……許せないよ」

真琴、動かない。

結乃 「そんな簡単に許せない」

真琴、動かない。

友恵、しゃがみこんで真琴を見る。

真琴、お辞儀をしたまま。

真琴 「友恵も、ごめんなさい」

友恵 「うん……うん……」

結乃 「許せないけど、私、真琴は親友だと思

ってるの。私にとって真琴は、必要だから」

真琴、顔を上げる。

結乃 「辛い時に駆けつけてくれてありがとう」

真琴 「ごめんなさい……ありがとう」

友恵「さ！そろそろ行かなきゃ遅刻しちゃう」

結乃、真琴、友恵歩き出して。

結乃「久々だな、学校」

真琴「どうなってると思う？」

結乃「え？わかんない、どうなってるの？」

友恵「もう、すごいよ」

結乃「何が！？」

真琴「結乃がいない間にほんと色々あって」

友恵「語りつくせない壮絶なドラマがね」

結乃「マジで！？どんな！？」

真琴「まあ行ってからのお楽しみだよ」

友恵「もうねえ、うひょーって感じ」

結乃「出たうひょー！」

真琴「ほんとうひょーだよ」

結乃「え、全然伝わらないんだけど！教えて

よ！」

真琴「実は私がいじめの標的になってて」

友恵「真琴の机の中なんて毎日ゴミが詰め込

まれてるんだよ」

結乃「もう、そんな冗談はいいから」

真琴「冗談に聞こえるところがまた怖いんだ
って」

結乃「だって冗談でしょ」

友恵「どうでしょうかなー」

結乃「何だよその変な日本語！」

友恵「だって私も相変わらずオタクオーラ全

開だから」

結乃「それはわかる気がする」

友恵「でも人気者だよ？」

結乃「嘘でしょ」

友恵「バレたか」

真琴「とりま朝はゴミの片付けからだからよろしく」

結乃「はいはい」

真琴「あ、信じてないでしょ」

結乃「だって、ねえ」

友恵「うひょー！」

結乃「うひょー！？」

真琴「うるさいよもう！」

結乃、真琴、友恵、笑って走り出す。

○ 学校・門（朝）

結乃、真琴、友恵、仲良く入っていく。
後ろから制服姿の男女がやってくる。

サクラ「ちよつとこの制服ダサくない？」

カエデ「よく似合ってるよ」

サクラ「そう？でもスカートがちよつと長い

し色もちよつと地味じゃない？」

カエデ「サクラが着ると何でも華やかに見えるよ」

サクラ「やっぱりそうかしら」

カエデ「そう言ってほしかったんだね」

サクラ「まあね」

サクラとカエデ、門をくぐり入っている。
く。

○ 同・廊下（朝）

サクラとカエデが歩いている。

周りの生徒達、サクラとカエデに見とれている。

カエデ「注目の的だね」

サクラ「いい景色」

カエデ「結乃は喜んでくれるかな」

サクラ「怒るんじゃない？急に消えたんだから、私たち」

カエデ「そうだね」

サクラ「でもいいのよ。私たちは結乃に会いたいんだし、会えたら嬉しいんだから」

カエデ「サクラは結乃が大好きなんだね」

サクラ「あら当然じゃない。カエデは好きじゃないの？」

カエデ「好きだよ。でも。だからまた、こうやって会いに来たんだ」

サクラ「心配だから？」

カエデ「さあね」

サクラ「私はね、まだ食べてなかったから」

カエデ「もしかして」

サクラ「そう、結乃の手作りクリスマスケーキ」

カエデ「食に対する執念がすごいね」

サクラ「それが私の最大の魅力でしょ」

カエデ「君の最大の魅力はその美貌でしょ」

サクラ「あ、そうだった」

カエデ「そう言ってほしかったんだね」

サクラ「まあね。ちよつとした確認よ」

カエデ「僕もお人好しだよまったく」

サクラ「それがあなたの最大の魅力」

カエデ「はいはい、褒めてくれてありがとう」

サクラ「いいのよ」

○同・教室の扉の前（朝）

結乃、真琴、友恵。

結乃「なんだか緊張する」

真琴「大丈夫だよ」

友恵「私たちがついてるからね」

結乃「うん！」

○同・教室の扉の前（朝）

サクラとカエデ。

サクラ「ドキドキしちゃう」

カエデ 「そうだね」

サクラ 「じゃあ、行きますか」

サクラとカエデ、扉に手をかけて。

カエデ 「準備はいいか？」

サクラ 「あなたの未来に願いを込めて」

扉が開き、光が差し込む。

（終わり）